

依つてこれ等の湖水は地下で結合してゐると土地の人達は思つてゐる、予も亦此の考へに賛する。富士の東方及び南方は火山岩から成る、西方富士川左岸の山地は其の高處は閃長岩質である。三湖の北方の山地の北側は花崗岩である。其の南側即ち富士の側では花崗岩が古い綠色凝灰岩(輝綠凝灰岩)で被はれてゐる。甲斐と駿河相模との國境をなす北東の山脈も亦花崗岩である。此の山脈は富士の極近くまで連互し來り、富士山の火山滓で被はれてゐる。此等の山脈の

伊太利ところぐ (十七)

瀧川規一

山陵の續きは富士の頂上を過ぎる様な有様にある。其れ故富士は多分花崗岩上に建設されたのであらう。

本篇中の噴火の歴史は孫引が多いから今では役に立たない富士噴火の記事の最も詳しいのは井野邊茂雄著富士の歴史及び石原初太郎著富士の地理と地質に見ることが出来る。然るに本篇にかゝげた富士火口燐岩の分析はいつも引合ひに出るもので、其の後富士燐岩の化學成分を研究したことがないのは木邦岩石學界の爲めに遺憾とする所である。

次回からはラインの中山道誌を連載しようと思ふ(編譯者)

【アシシ詣で】 羅馬からアシシ(Assisi)行きの中の人となる。三人の伊系米國婦人と一人の伊太利人と二人の日本人が汽車の一室に席を占める。三人の婦人中一人は盲目である。彼等の

談によると伊國を去つて紐育に住すること十數年、盲目の友人がアシシの寺に詣でたいと云ひ出したので本國見物旁來たのである。見るから盲人ながら美しい婦人である。年輩は何れも二

十四五歳。相當に澁皮のむけた連中である。一室に閉ぢ込められると何時の程か最初の沈黙を破つて談じ始める。斯うした場合愛想のよいのはいつも白人である。盲目の婦人はギタを鞆からとり出して弾じ始める。他の二人の婦人はそれに調子を合はせて歌ひ出す。東洋人たることを知つた彼等は支那人の戀を主題にして流行唄まで歌ひ出す。侮辱の積りではない。吾等極東人をもてなす積りの好意である。道伴れの同胞は無言で押し通してゐる。余に向つて餘り無駄口を利くなとさへ忠告をして呉れる。ヴェスヴェヒアスの山頂で太い一物を出して地中海に向つていばりをなし、山靈に對する冒瀆を致へてなした程の男がこの時に限つて無言の禮節を守つてゐる。やがて隣室からも伊國の紳士が二三人集り來り、盲人のギタをとつて面白うあかしく歌ひささめいて笑ひ興じる。暑き日の夏旅は斯くして憂さを忘れ、正午過ぎに寺院近くのホテルに着く。

【聖フランシスの史的事實】 聖フランシスに

就いては二三回故國に於て人様の講演をきいた回顧すると一人の講師は聖フランシスの禁慾主義と謙抑そのものであるフランシスの人格を説き來り説き去り、聽衆をして、聖フランシスの神秘的人格に讚仰せしめ、アシシをして無上の靈域たることを印象せしめた。一人の講師は、聖フランシスが凡て現代人の欲求する主義運動及び精神を創始したかの如くに説いた。聖フランシスは時代に先んじ、近代人と同じく自然を愛し、慈心を下等動物に及ぼし、人間社會に於ては人間相互の同情を必要とし、甚しきは富と繁榮は人間の精神を害する毒物なりと信じ極端に貧者に同情してゐたと云ひ、聖人は文藝復興の明星であり凡ゆる近代思想の先驅者であるかの如く詳述して、聖フランシスの人物を聽衆の眼前に躍動せしめた。第三の演述者は宗教家としてのフランシスを説くと共に史實の人物を説かんとした。聖人は陽氣な氣分の人でありロマンチックな想像をした人であり靈的に交友の情濃やかな人であつた。然し近代人の眼には不可解

な暗黒面をもつてゐる人物でありこの點を理解せんとするならば宜しく聖人の心を得べしと云つた。何れの方面から聖フランシスを説き來つても、必竟するに彼が凡人より離れてゐる諸點を列擧して聽者を神秘禁慾の境地に誘導せんとするのであつた。有難味を十二分に聞かされたが、説教や宣傳の蔭に實在する史實的人物については甚貧弱な材料しか與へられなかつた。種々の迷信や奇蹟が聖人の傳記に充されてその實體の如何なるかは現代人に解し得ない傾があつた。

今俗眼に映じた貧弱な事實を先づ列擧する。基督も釋尊も史的事實としては人間の子であるこれと同じく聖フランシスも歴たる人間の子である。魔の子でもなければ妖精の子でもない。アシシの町の裕福な呉服屋さんの息子である。その誕生に際しては日出の太陽が母の胎内に入つたので日吉丸とか日出雄とかの名をつけられたと云ふが如き因縁譚をもつてゐなかつたらしい彼は只一八二二年頃に金持ちの呉服商人の子と

して世に生れ出たに過ぎない。然かも父親が商用で佛蘭西に旅行中に生れたのである。父の名をピエトロ・ベルナルドネ(Pietro Bernardone)と云つたが、その父が商用で佛蘭西に滞留中、聖フランシスが生れたと云ふので母親は小供の名をフランチェスコ(Francesco)と附けた。英語流に云へばフランシス(Francis)であり「小さい佛蘭人」との意である。英國の學校などで生徒が佛語が巧みで他に群を抜んで居るとフレンチ(Frenchy)と云ふ渾名を頂戴することがある。それに似た命名の仕方である。主人が英國に留學中に産れた小供に英作とか英吉とか命名すると等しい。裕福な商賣の家の坊つちやんと生れて來た彼は青年時代まで人並みの道樂息子であつたらしい。今日の所謂教育を受けて居らぬのみならず身體も丈夫で、小遣錢は不足しなかつた。爲めに近隣の道樂息子の隊長でもあつた。

彼が丁年に達する頃にはアシシの町は戰爭氣分に包まれた。アシシの町と近所のペルシア

(Pangia)とが相反目し軋轢の結果、兩市民は

戦闘状態にあつた。當時アシシの町から追放された貴族等が居つて、ベルジヤはこれ等の貴族の爲めに暴力をもつてアシシを襲ひ、以てこれ等の貴族を原の位置に復歸せしめんとした。兩市民は兩市の間にある平野で矛を交へることになつた。青年のフランチェスコはその戦闘に參加した。然しアシシの軍隊は利あらずしてフランチェスコは捕虜の身となつた。若しフランチェスコが極東の男子であるならば、近代思想にかぶれざる男子であるならば、一戦敗の責を戦闘員は各自に負ふたであらうが、白人と吾等とは歴史と環境とを異にする。彼はベルジヤに捕虜として一ヶ年を過した。生來彼は快樂を求め人の集る處を好み、暢宴と歌とを好んだ。捕はれてゐる一ヶ年の間でも他の同胞の捕虜に向つて陽氣や呑氣な態度を持し、且つ忍耐心にも富んで、他の人々と類を異にした。若しこれが今日の邦人であつたならば如何になつたか。せ、こましい國の人々は直に論難攻撃の的にしたで

あらう。

間もなくフランチェスコには長期の重病が起つた。その病氣は今日の醫學より見て何の病名をもつて居たか寡聞にして知らない。兎も角重病が長引いた。病中彼は、誰しもなすことであるが、自己を省察した。さうして今迄の生活に満足せず何か一新生命を開かんと欲した。この際彼が考へたことは未だ宗教ではなくて軍事的功名であつた。彼は病氣の癒ゆるや遠征軍に加つた。當時シシリ島が諸侯の注意の的となつてゐた。その王位をゴーチエド・プリエンヌ (Gauthier de Brienne) と云ふ伯爵が要求し、羅馬の法王廷がこれに賛成し、この島に向つて遠征軍を起した。フランチェスコが病中に夢想した功名は中世らしく武士道の功名であつた。彼は早速とこれに加はり、門出に際して歸れば偉大な王侯となつて歸らん」と云たかどうかは確でないが、戦陣の門出勇ましく家を出ただけは確である。然し幸か不幸か最初の一日の進軍の終に早くも病氣になつてスポレット (Spoleto) に滞

留し遂にアシシに歸らざるを得なくなつた。彼にとつては失望の極であつたと同時に精神的轉換が孕んでゐた。或日彼は友人等を私宅に招いて宴會を催した。宴會の終るや友人等は各手に松火をもち歌を高唱して市中を練り歩いた。フランチェスコはその飲み友達先頭に立つた。彼は頭に花冠をつけてゐる。暫すると彼の姿が見えない。皆の者等は來た道を引き返へして彼を捜し廻る。漸くにして見つけた時は、フランチェスコは失神状態になつて別人の如き様子をしてゐた。これまでの彼は實に放蕩息子である。親の苦んで儲け貯へた金を無造作に消費してゐる。金持の息子に有勝ちの經路を彼がとつたのである。これから後もまださうであるか。只仕事か變つたまでであるか。

この暢宴を一期として彼の人間が變つてゐた彼は孤獨の場所を欲した。祈禱に餘念がなかつた。貧者の爲めに盡さんと努めた。間もなく羅馬にお詣をした。羅馬に行つた時、セイント・ピエータ寺院の前で普通の乞食の群を見てその一人

と衣服を交換した。のみならずその日は乞食の群と交つて物乞ひをなした。それによつて得た體驗を悦んだ。羅馬から騎馬で歸る途中で彼は癩病患者に物を乞はれた。彼は貧者に同情をしてゐたが、以前は癩病患者に對して特別に恐怖を感じてゐた。物を乞はれた時彼は顔をそむけて馬をさつさと乗り進めた。然し彼には自己征服と云ふ念が直に起つて來て、馬首を返へし馬より降りて所有の金を悉く與へ、剩へ、その癩病患者の手に接吻した。その日を期して以後は天刑病者の爲に盡し病院建設の爲めに全力を盡した。遂には身に襤褸を纏うて乞食姿をして出歩いた。悴のこの様子を見て、困つたのは彼の父親及び肉身の兄弟等であつた。彼の舊友等は彼に泥土を投げつけた。

フランチェスコが軍人として功名を夢みて成らず身の前途全く暗憺たる時常にアシシにある聖ダミアン (St. Damian) の教會の廢墟に來て默禱を捧げた默禱中に天から聲が聞えた「フランシスよ私の家が廢墟になつてゐるのを見ない

か。さあこれからこれを再興せよ」と云ふのである。斯う聞いたのかそれとも斯う聞いたと思つたのかその邊は今日の如く科學的でないから判明せぬ。元來今日までの行爲によつて察し得られるが如く彼は活氣に充ち、性勝ちの氣質であつた。常に何かしてゐなければ承知の出來ぬ性分であつた。その天の聲を聞いたと思ふと矢も楯もたまらなかつたらしい。彼は前後を考へる暇もなく寺院再建に着手した。その資金を得る爲めに第一に自身の馬を賣飛した。次に父の商品たる反物の幾袋かを十字の印をつけて賣飛ばした。賣飛ばす動機に至つては悪いとは云へないが、その手段たるや甚悪い。慈善心はよいから貧困者に施物をせよと教へられた幼稚園の生徒が無暗矢鱈に親の目を忍んで家の品物を持ち出すのと等しい。フランシスの父親が裕福なればこそ遠征軍に加はることも出來たであらうし羅馬に行くことも出來、癩者に金を恵むことも出來たであらう。また暢宴の主人となることも出來たであらうし、貧者に施すことも出來た。

而かも今や天の聲を聞いたとて馬を賣つた。その馬も亦父の馬たることを失はない。更に商品までも盜み出して賣り飛ばす段に至つては愈極道息子の思慮分別無さが明になる。父親にとつてはこの子供の未來は未知數である。今日ならば禁治産にするか準禁治産にするのが當然である父親兄弟は嘸かしの無分別を見て困惑したことであらう。父親は今迄の仕草を見て既に困つてゐた。貧者に恵むとは云ひ條、無制限な施し方である。今また寺院再建に手を着けた。父の財産を蕩盡することは火を賭るよりも明かである。父は遂に我慢が出來なくなつた。父は忤を監禁した。單純なる信者はこの時の父の行爲を責める人がある。それは未だ極道の子供を持つと云ふ苦い經驗を知らぬ人の言草である。若し親泣かせの極道息子をもつ苦勞を知つた人であるならばフランシスの父親のこの時の行動を是認するであらう。父親は斯くして瞬の間に全財産を費消し盡されることを憂ひて、アシシの僧正の法廷に廢嫡の訴を起した。兩人は法廷に

招喚された。この時僧正は如何なる態度をとつたか未來の聖人フランシスに對して如何なる處置を採つたか。父親の立場からも考へなければならぬであらうし、息子の立場も考慮してやらねばならぬ。賢明であるべき宗教界の人が稍もすれば常識を逸することは古今東西揆を一にしてゐる。その時の裁判の仕様が面白い。僧正は先づ非常に常識に富んだ訓戒をフランシスに與へた當時はセイントと呼ばれる熱狂的な信神家が絶えずカトリック教の高位にある僧正等を惱ましてゐたので、これ等の宗教的熱狂者に對しては加教の權威者等は常に穩健なる常識的態度をとつてゐた。この場も亦今日何人も是認し得る言を僧正は云つてゐる。僧正はフランシスに云つた「父の金は父に返へさねばならぬ。たとへ動機は善良であるにしても不正なる手段ならば祝福を與へることが出来ない」と云つた。然しフランシスはどこまでも親に對して不孝振りを發揮した。フランシスは居並ぶ人々の面前に立ち上つて云つた「今日まではピエトロ・ベルナ

ールドネを父と呼んで來たが、今からは自分は神の下僕である。金銭は云ふに及ばず父のものだと云ひ得る凡ての物はこれを父に返へさう。父が與へて呉れた衣服をも返へさう」と云つて、着て居るものを引裂いて肌着一枚となつた。その肌着は基督教では苦難の業を示す毛のシャツであつた。然し彼はこの時父より貰つた肉體を返へさうとは云はなかつた。彼は脱ぎ棄てた衣服を疊み重ねその上に金を投げつけた。それから彼は僧正の祝福を求め、衣服を貰つて（一説には毛のシャツのままで）スバシオ山 (Subasio) の森に佛蘭西の歌を高唱しつゝ入つた。彼は佛語に非常な興味をもつてゐたが會話は出來なかつたと云はれてゐる。兎に角、好きな佛蘭西語の歌を誰憚ることもなく高らかに歌ひながら森林に入つた。父親を放棄した不孝な子は斯くして母語ならざる佛語の歌を歌つて森の子とはなつたが、この時森に住んでゐた山賊は彼に呼びかけた。彼は山賊等に答へて「吾は大王の使者である」と云つたと云ふ。彼が歌つた歌は當時

のプロヴァンサル(Provençal)語の歌であつたであらうと思れる。また山賊との回答は果して眞なりや誰もその場に居合はせなかつたので、後世の傳説を信ずるより他に方法がない。

新著紹介

○播磨風土記新考

井上通泰著 大岡山書店發行

定價七圓五十錢

菊版五八九頁索引つきの大本である。播磨風土記は和銅六年の勅によつて作られたもので、靈龜元年以前の著述である現存せる五つの風土記の中でも古い本である。この本は嘉永五年三條西家に傳はつてゐる寫本から、世に現はれたものである。井上通泰博士の考證は親切であつて、要を得てゐる。殊にうれいのは附録の播磨の古地圖の説である。近頃この方面に興味のある筆者は、これをあかず眺めたことであつた郷土研究家に一讀をすゝめる。(藤田)

○概観日本地誌下巻

山本熊太郎著 古今書院發行

定價四圓五十錢

昨年上巻を出版されたのち、山本君は愈猛烈に勉強したらしい、其結果下巻菊版五八〇頁の大冊となつて、こゝに上下二巻が揃つた、本書は上巻の後をうけて九州、臺灣、北海道

樺太、朝鮮、關東州、南洋の七章から成立し自然地理、地誌人文地理にわたつて、親切に集成されてゐる、圖版二六五、いづれも著者獨特のスケッチ風のもので、いづれかといへば自然地理の方が分量が多く説明も面白い、とにかく多數の報告をこゝ迄まとめる爲めにさげられた犠牲も多かつたことであらうと考へる、恐らく小中學校の教授者には、よい參考書であらうと信じる。但し索引があつてもよかつたと思ひ、又かうした本に寫眞や古い地圖なども入つてゐた方がよかつたと思ふが、それは望外の慾にすぎない、予は同君の日本總論が出来ることを期待しつゝ、本書の上梓を祝福する。(藤田)

○世界地誌

西歐及中歐篇 帷子二郎著 古今書院發行

定價六圓五十錢

古今書院は又々かうした大冊子を出した。これをかゝれた帷子君も、さぞ骨が折れたことであらうと考へる。ヘットナーの地誌によつて其他三四の外書を見て之を篇されたので、イギリス、フランス、ドイツ及其附近の二三の國々で、この一巻菊版七六六頁の大冊子になつた、蓋し近頃地理書出版界の一大巨擘である。多數の人の無責任な講義風のものを集めるのとは違つてたゞそれ一人の篤學者が、仔々とした努力でこの大冊子にした事は、時節柄絶大の賞讃をさげねばならぬのである、もしもこの勢で歐洲續篇其他が矢つぎ早に出るならば、それは驚くべき成功と云はねばなるまい。本地誌は編者の云はれるやうに自然地理經濟地理に對する在來の獨逸